東南アジア研究　11巻3号　1973年12月

# ビルマの壁画
## ―― パガン時代を中心として ――

大野　徹*

# Wall Paintings in Burma of the Pagan Period

by

Toru OHNO

## はじめに

1972年11月から73年3月まで，鹿児島大学のビルマ学術調査隊(隊長荻原弘明教授)の隊員の一人として，ビルマ史跡の実地調査に従事した。[1] 調査旅行の全期間を通じて私がもっぱら力を注いだのは，(1) ビルマ語碑文の拓本採取，(2) 貝葉および折り畳み手写本(パラバイ)の複写，(3) 壁画の撮影の3点である。本稿ではその内の壁画について報告することにしたい。

ビルマの壁画は彩色画で，その大部分がビルマ語でグー・パヤーとよばれる内部に回廊(繞道)をもったレンガ造り窟院の内部の壁画や天井に描かれている。僧院の廊下(パヤー・ダザウン)に描かれていることもある。画題は大半が仏伝図や本生図で，[2] 一種の宗教画といって

*　大阪外国語大学ビルマ語学科

1) 調査の概要はアジア・レビュー誌上に座談会記事として掲載されている。「ビルマ文化の予備調査を終えて」『朝日アジア・レビュー』第14号，1973年6月，pp. 32-43. なお私達の今回の調査旅行については，全般的なお世話をしていただいた Dr. Nyi Nyi 以下のビルマ政府文部省，宿舎と交通機関の便宜を図ってくれた各地の治安行政委員会 (S. A. C.) および教育委員会，U Aung Thaw, U Thein Han, U Than Htut といった文化省の3局長，および鈴木大使，鈴木文化担当理事官，奥平書記官，池谷副理事官といった在ビルマ日本大使館関係者，資金的に協力して下さった関係企業，その他数多くの邦人ならびにビルマの人々から終始緩かい御支援と御協力をいただいた。私達の調査旅行はこうした方々の御協力があって初めて実現したものである事を記し謝意を表したい。特に日中30度を越す炎熱の下，舞い上がる土埃を私達と一緒に吸いながらパガンの仏塔寺院を一週間近い休暇をとってまで熱心に案内してくれた美術家 U Aye Myint (Wazi Factory)，および私達の Liaison officer を務めてくれた U Yaza の協力を忘れる事ができない。

2) パガン時代のビルマ語碑文には「寺院の内部に550の本生図を描いた」という記述がしばしばみられる。例えば，U Pe Maung Tin and G. H. Luce. *Inscriptions of Burma.* Portfolio I～V. pl. nos. 73, 105a, 194, 248 など。

よい。その点ビルマの壁画は，同じく寺院内でよく見かける各種の浮彫りと同じ性格のものと考えることができる。画題は，後世になると宮廷生活や庶民の日常生活を描いた現実的，世俗的なものも現われてくる。

描かれた時期は11世紀から19世紀までの800年間にわたっているが，パガン時代に描かれた壁画の中には色が褪せたり，変色したり，あるいは壁面が磨損，剝落したりして原形を失いかけているものも少なくない。また，篤信の壇家の手によって壁面が真白に塗りつぶされていることもある。こうした人為的な破壊によって，せっかくの貴重な壁画が完全に姿を消してしまうことがないようその完璧な保存対策が切に望まれる。

ビルマ政府文化省の考古局では，1903年のマンダレー支局開設以来代表的な壁画の模写作業に取り組んできており，今までにパトウダーミャー，アベーヤダナー，クーピャウヂー，チャンシッターオウンミン，パヤートンズー，ナンダミンシャといったパガンの壁画や，サガインにあるティローカグール窟院の壁画などの模写が完了している。私達がマンダレー支局（主任研究官 U Sein Maung Oo）を訪れた昨年12月には，モンユワー県アミン村にあるインワ時代の壁画の模写に従事していた。

ビルマの壁画全体に関する最もすぐれた概説書とも言うべきビルマ政府文化省考古局編纂の「古代ビルマの壁画」[3] は，ビルマ壁画の時代区分を，(1) パガン時代，(2) インワ時代，(3) コウバウン時代初期，(4) アマラプーラ時代，(5) ヤダナーボン時代の5期に分けている。こうした区分の仕方にはなお検討の余地があると思われるが，本稿ではとりあえず上記の時代区分に従って，今回私達が調査し得た壁画のうちパガン時代のものを取り上げて整理し，その画題，構図，画法，特徴などについて記述していくことにしたい。

## I　パガン時代の壁画の特徴

パガン時代の壁画とは，11世紀中葉から13世紀後半までのおよそ200年の間に描かれた壁画を指す。画題の大部分は仏伝か本生譚である。仏伝図には，触地印の降魔成道像を中心としその周囲に降兜率，出胎，初転法輪，ナーラーギーリ象の調伏，ナンドーパナンダ龍王灌頂，アーラーワカ羅刹の調伏，入涅槃などを配した釈迦八相図が多い。出胎図，降兜率図など，八相図の中の一場面だけを取り出して描いたものも少なくない。過去28仏が描かれていることもある。

釈尊図には立像と坐像とがあるが，坐像の場合には降魔成道像が圧倒的に多い。印契は通常触地印か法説印である。釈尊の顔は一般に丸顔か丸味を帯びた角顔である。耳たぶが長くまさに両肩に触れんばかりに垂下している。頭部は剃ってあるが螺髪にはなっていない。頂上の肉

3) Pyidaungzu Yinkyehmu Htana. *Shayyoe Myamma Bagyi*. Rangoon, 1966, p. 30+XXIV.

髻にはまんじゅう型，つぼみ型，屹立型の3種がみられる。そのほかの“相好”はさほど明確ではない。身にまとった袈裟は偏袒右肩が普通である。一方，過去28仏は通肩が一般的で釈尊像とは対照を成している。過去仏の印契は説法印か禅定印である。

仏伝図は一般に画像が大きい。これに対して本生図は描くべき場面が多いせいもあって画像が小さい。たいてい縦横数十に仕切られた四角い枠(パネル)の中に一場面ずつ描かれ（一図一景)，その下にパーリ語，モン語，またはビルマ語による本生譚番号とその名称あるいは説明文などが記されている。

本生譚は，ビルマでは550の物語として知られている[4]が，実際に壁面に描かれているのはタウンビー西のモン寺290パネル，ミンピャグー寺院498パネル，ナガヨン寺院284パネル，アベーヤダナー寺院の北壁面150パネル，クーピャウヂー（ミンカバー）寺院の496パネル，クーピャウヂー（ウェッチーイン）寺院の544パネル，ローカテイパン寺院40パネルというように不統一である。

壁画の構成としては，一般に祠堂(奥室)の天井に仏足跡または星宿図が描かれ，壁面は上層に長部，中部などの経蔵に叙述されている場面，場合によっては過去28仏が描かれ，その下層に仏伝あるいは本生図が描かれる。壁面が上，中，下と三層に分かれている場合には最下層に地獄図が描かれていることもある。一方，前室(入口を入ってすぐの広間)に壁画が描かれている場合，その画題は例外なく本生図で，左右の壁面を数十のパネルに仕切って描いている。祠堂と前室の境の三角壁にも描かれるが，ここの画題は八相図の中の一場面であることが多い。

画法の面では，パガン時代の壁画すべてに共通した特徴がみられる。その第1は透視法が用いられていないため，人物像にしろ建物にしろ，遠近感が表現されないままになっている事である。同時に，陰影法が採られていないことから絵全体が平板で立体感を欠くうらみがある。第2は，表現の中心となる部分を大きく誇張して描き，その他の部分を対照的に小さく描くという技法がしばしば採られていることである。その結果絵全体が不自然で著しく写実性に欠ける。第3は，人物像を描く場合輪郭の線が強調されていることである。その場合，はじめに輪郭を線で描き，その後で彩色を施すという手順が踏まれている。パヤートンズー寺院の壁画には，輪郭だけが描かれ彩色は施されないままの人物画がみられる。

第4は，人物の体つき，顔の表情である。これには地域差と時代差とがある。その一つは，身体全体に動きが少なく人物が静的なものである。このタイプの像では顔が丸顔，一重瞼，男性の場合は口髭，頬髭，頤髭などを黒々と生やしている点が特徴である。こうした人物像は，

4) 例えば，ボウドーパヤー王の治世当時ニャウンガン僧正によってビルマ語訳された小部経典(Khuddaka Nikaya)の中の本生経(Jātaka)には「五百五十のジャータカ物語」という題がつけられている。Nyaunggon Hsayadaw. *Ngaya Ngaze Zattawgyi Wutthu*. Vol. I, II, Rangoon 1968.

パトウダーミャー，クーピャウヂー，アベーヤダナー，ローカテイパンなど，11世紀後半から12世紀前半にかけて建立された寺院(地域的にはパガンとミンカバー村の周辺に集中している)の壁画に多い。もう一つのタイプは動的な像である。全体として体つきが優婉，ことに女性の場合は腰および下半身がしなやかな彎曲を示す。男女とも顔が長く，鼻も鳥の嘴のように鋭く長く尖っている。瞼は一重で眼つきが鋭い。鼻が尖っている点はエローラ窟院の人物画を，眼つきが鋭い点はアジャンダ窟院の人物画を，それぞれ連想させる。こうした特徴をもつ顔は少なくともビルマ族のものではない。この非ビルマ的な人物像は，ナンダミンニャ，パヤー・トンズーなど13世紀に建立された寺院(地域的にはミンナントゥー村の周辺に多い)の壁画にみられる。

特徴の第5は色彩である。パガン時代の壁画には，黒，赤，茶，薄黄など全体的に暗いくすんだ感じの色が多く使われている。青や緑をふんだんに用い，華麗で鮮かな色彩を特徴とするコンバウン時代の壁画とはきわめて対照的である。パガン時代の壁画にも，もともと青色や緑色が用いられていたと考えられるが，長い年月の間に変色した結果，青や緑色が用いられていないような印象を与えるのであろう。

第6は，ビルマ語でカノウパンとよばれる装飾文様が随所に描かれていることである。カノウパンというのは蓮華または蓮の蕾，蓮の茎，蓮の葉などを素材にそれらを装飾的に描いたもので，一種の唐草模様のことである。描かれている場所は，壁面の四隅，天井と壁面との境，祠堂と前堂の境の三角小間など付随的なところが多い。天人像や各種の動物図は，一般にこのカノウパンの隙間に描かれている。

## Ⅱ　壁画の所在地点とその内容

今回私が実際に調査し得たパガン時代の壁画の所在地とその内容とを具体的に述べると次のようになる。

### 1.　パトウダーミャー (Patothamya) 寺院

11世紀の後半ソールー王によって建立された基壇一層の寺院で，タッピンニュ寺院の真西，ヒンズー教寺院として名高いナッフラウン・チャウンのさらに西にある。寺院の内部は東西に分かれ，東側が前室，西側は祠堂になっている。壁画は祠堂の回廊南北両壁にあり，すべて仏伝図である。壁面は剝落がひどく不鮮明な図が多い。壁面の最上層にはモン語により律蔵が，二層目には経蔵(長部，中部)が描かれ，その下の層(眼の高さの位置)には仏伝が60パネル描かれている。ここの絵で有名なのは，浄飯王が両手で抱き上げている悉達多太子をカーラデービラ(黒執天)が礼拝している図(阿私陀仙の予言)である(南回廊外壁)。左手で髪の先端を握り右手に持った剣を髪の髻にあてた落飾図(北回廊の外壁，写真1)，王舎城での布施

(北回廊外壁)，牧女献乳(東回廊外壁)，双神通(南窓の東壁)，出胎(南壁)，説法印を結んだ通肩の仏陀坐像などもある。いずれも画面の下にはモン語による墨文の説明がみられる。画中の人物は丸顔で鼻が高い。眉毛は細く瞼は一重で眼つきが鋭い。男性は例外なく口髭，頬髭，頤髭を生やしている。男女とも耳たぶには丸い大きな耳環をはめ込んでいる。仏陀像は丸味のある顔容をしており，耳たぶが長い。頭部は剃髪しているが螺髪ではない。肉髻は屹立型である。出胎図には摩耶夫人の右脇下から生れ出た悉達多太子の像は描かれず，すでに衣服をまとい冠を頭にいただいた太子の立像が描かれている。

**写真1**　パトウダーミャー寺院の落飾図

## 2.　アベーヤダナー (Abeyadana) 寺院

11世紀の後半チャンシッター王によって建立された基壇一層の寺院で，北側の前室とその南側の祠堂とから成っている。位置はミンガバー村の南端，ナンパヤー寺院のさらに南，ナガヨン寺院の西北西にある。壁画はあまり鮮明とは言い難いが，前室の北壁に本生図が8列150パネル残っており，各図の下にパーリ語による墨文の説明とニパータ番号とがみられる。かつては東西両壁にも本生図が描かれていたと報告されている。祠堂の回廊外壁の壁画には説明文がないので詳細は不明だが，描かれているのは大乗系の菩薩像だと考えられている。それは床上80センチくらいのところから天井と壁との境まで五層にわたって描かれており，菩薩から仏陀に到るまでを段階的に描いたものと考えられる。まず最下層の唐草模様の上に描かれている菩薩像であるが，右足を立て膝にし，左手には剣または槍を，右手には法輪を持っている。頭には宝冠をいただき，丸い大きな耳飾りや二重の首飾り，腕環などの装身具を身につけている。眉毛は

**写真2**　アベーヤダナー寺院の菩薩像

細く眼は菱型で眼つきが鋭い。その真上，すなわち仏龕と仏龕の中間壁面のやや上方に描かれている菩薩像(写真2)も，宝冠をいただき丸い大きな耳環をつけ，首には首飾りを，上膊部や手首には腕環をはめている。蓮華の上に坐してはいるものの結跏趺坐ではなく，右足を斜めに垂下した遊戯坐である。右手は与願の印，すなわち膝の上にのせ指先を下にして掌を外側に向けている。一方左手は，肘を曲げ胸の前で親指と中指とを接して輪を作っている。その環の中を蓮の茎が下から上へと通り抜けて左肩の上で花を一輪咲かせている。菩薩の頭の背後には円形の光背がある。顔は丸顔だが細い眉が釣り上がり，半眼(菱型)のせいか眼つきが鋭い。宝冠の下からはみ出した黒髪が両肩を覆っているのがはっきり認められる。左右に一人ずつの夾侍がおり，菩薩に向かって合掌している。二段ある仏龕の上段の仏龕と仏龕の間に描かれている菩薩像は立像で，蓮華の上に左右の足先をともに外側に向けて立っている。左手は肘を上に曲げて環を持ち，右手は胸の前で槍の柄を握っている。この菩薩の頭上から蓮の茎が真直ぐ上に伸びているが，その頂上の蓮華の上に説法印の仏陀坐像がみられる。以上が回廊南側外壁の壁面にみられる代表的な絵である。下から上に向かって5段階になっている絵のうち，一，二，四層の菩薩像と最上層の仏陀像とは相当大きいのですぐそれと分かるが，三層目だけは図がきわめて細かいので注意してみる必要がある。なお回廊内壁の仏龕と仏龕の中間壁面にも壁画があるが，これはブラフマー，シバ，ビシュヌなどのバラモン系神像だと考えられている。

### 3. ナガヨン (Nagayon) 寺院

11世紀の後半チャンシッター王によって建立された寺院で，ミンガバー村から南に向かう道路の東側にある。アベーヤダナー寺院とは道路をはさんで東南東の位置にある。この寺院は祠堂とその北側にある前室とから成っているが，祠堂の奥には文隣陀龍王に保護された施舞畏，与願印の巨大な仏陀立像が安置されている。壁画は回廊の内壁と外壁の双方に描かれている。内壁の上層には長部，中部，相応部経典の場面が，下層の仏龕と仏龕の中間壁面には本生譚(南壁中央に始まり西，北，東壁へと続く)が284パネル描かれ，各図の下にモン語の墨文説明がみられる。回廊外壁の絵は相応部経典の場面を表わしたものである。仏伝図，本生図ともにあまり鮮明とは言い難い。この寺院の代表的な壁画は，回廊東側の外壁に描かれている燃燈仏 (Dīpaṅkara Buddha) 足下の善彗 (Sumeda) である。この図の人物像にはみな口髭や頤髭が黒々

**写真3**　ナガヨン寺院の踊り子

と描かれており，いずれも身長の割には顔が大きい。仏伝図には初転法輪(東回廊内壁)，王舎城での布施(南回廊内壁)，ナーラーギリ像の調伏（西回廊内壁)，双神通（南回廊外壁）などがある。仏龕と仏龕の中間壁面に描かれている仏陀像は，結跏趺坐し説法印を結んでいる。パトウダーミャー寺院の仏陀像同様，丸顔で耳が長く，肉髻が真上に向かって高く屹立している，頭部は剃っているが螺髪ではない。左右に夾侍が1体ずつおり，仏陀に向かって合掌している。この寺院にある壁画の中で最も興味をひくのは，回廊内壁の下層に描かれた一群の楽士と踊り子の画(写真3)であろう。踊り子は首を右に曲げ，白い布をもった左手を頭の上から右に廻し，右手は胸の前から左脇下へと伸ばしている。両脚は膝を外側に向け菱型に曲げている。楽士は踊り子の左右に3人ずつおり，それぞれ小太鼓やにょうはちなどの楽器を演じている。上半身に衣をまとい，耳に丸い耳環をはめ髪を後に長く伸ばしているのは女性，上半身が裸なのは男性と思われる。この画はかなり低い位置に描かれているので，注意して見ないと見落とす惧れがある。

### 4. クーピャウヂー（ミンガバー）(Kubyaukgyi-Myinkaba) 寺院

12世紀の初頭チャンシッター王の子ヤザクマールによって建立された基壇一層の方形寺院で，位置はミンガバー村の北端，四面石柱のミャゼーディー碑文で名高いミャゼーディー・パゴダの西隣りにある。東側に前室，西側にシカーラをのせた祠堂がある。壁画は祠堂とその周囲の回廊および前室それぞれの壁面に描かれている。壁面は相当剝落しており，各図ともあまり鮮明とは言い難い。まず回廊外壁の最上層であるが，ここには仏伝(東壁東北隅の受胎図から始まる)が43図描かれている。その下の層すなわち第2列目には長部経典の宇宙創造の模様(入口南の東壁中央から始まり入口北の東壁で終わる)が描かれている。3列目(入口南の東壁から南，西，北の順)から9列目(北壁中央の窓)までは本生図で，全部で496パネルある。各図の下にはパーリ語による題名とモン語の説明文とがみられる。10列目は小パネル群で，飢饉，餓死の図やセイロン島史が描かれている。最下層の11列目(床上約20センチの位置)は入口南の東壁から始まり，象，馬，牛，獅子などの動物図がみられる。一方回廊内壁に描かれている画は，上層が仏陀の説法像，悪魔の襲来（西壁中央）などであり，下層19図は論蔵に基づく八相図（東壁北東隅の成道図から始まる）や，第一回(王舎城)から第三回(波吒梨子城)までの結集の模様などである。人物像はパトウダーミャー寺院やナガヨン寺院のそれに類似している

**写真4**　クーピャウヂー（ミンガバー）寺院の人物像

(写真4)。すなわち男女とも丸顔で，男性の場合には口髭や頤髭が描かれている。女性はいずれも髪が長く耳に丸い大きな耳環をはめている。この寺院の代表的な画は回廊西側内壁の宝階三道下洲の図である。これは忉利天で，母后摩耶に法を説いた後安居明けに黄金，白銀，紅玉3種製の階梯を通って僧伽舎へと降下する釈尊像を描いたもので，仏陀は袈裟を偏袒右肩にまとい，右手を与願の印に結び左手は掌を胸に当てて立っている。仏陀の前には合掌した帝釈天が，仏陀の後には傘をさしかけた3面の梵天が随行している。

## 5. ローカテイパン (Lokahteikpan) 寺院

12世紀前半に建立されたと考えられている基壇一層の中型寺院で，アーナンダ寺院の真南，タッピンニュ寺院の南東，シュエサンドー・パゴダからは約150メートル北の位置にある。北に面した入口を入るとすぐ前室があり，その奥に触地印の仏像を安置した祠堂がある。11世紀後半に建てられた寺院とは異なりこの寺院には回廊がない。壁画は天井と祠堂，前室両方の壁面に描かれている。どれもまだかなり鮮明である。画題は仏伝と本生譚で，各パネルの下にモン語(上層図)またはビルマ語(下層図)の墨文説明がみられる。天井の画は仏足跡で，角パネルの中に左右両方が描かれている。祠堂の壁画は南面が釈迦八相図，東面が忉利天での説法，北面が過去28仏，西面が本生譚で，南面を除きいずれの画にもモン語の墨文がつけられている。前室の壁画は東，西，北面すべて本生図である。本生図は縦横数十に区切られた小さなパネル群の中に描かれているのではなく，他の寺院とは異なり上下に区切られた横長の帯の中に絵模様のような形で描かれている(写真5)。画の下の説明文はビルマ語である。人物図は

**写真5**　ローカテイパン寺院の本生図

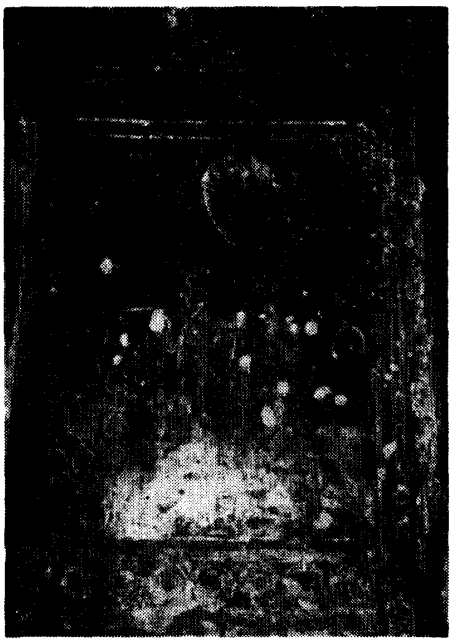

**写真6**　ローカテイパン寺院の出胎図

パトウダーミャー，ナガヨン，クーピャウヂー寺院のそれと同様丸顔で，男は例外なく頤髭を生やしている。額の髪の生えぎわは中央部で下がっており，頭髪も中央で左右に分けられている。衣服は下半身にのみまとい上半身は裸である。背景の樹木は扇型に円く描かれている。この寺院の本生図にはマハーニパータが多い。祠堂南壁にある釈迦八相図の位置は，中央頂上が入涅槃図，その下が悪魔の襲来，向かって右側は上から下に降兜率，双神通，出胎，右側はナーラーギリ象の調伏，初転法輪，パーリレーヤカの退却の順となっている。出胎図(写真6)は，パネル中央に立った摩耶夫人が右手を上げ，左手を自分の左側に立っている妹波闍波提(Pajāpatī) の肩にまわしだらりと前に垂らしている。頭上には先端の尖った冠の如きものをかぶり，耳には丸い大きな耳飾りをはめている。眼は切れ長だが上瞼が分厚くややはれぼったい感じである。眉毛は細く短い。顔はうりざね顔で幾分右に傾けてはいるが，まなざしは正面を向いている。鼻はナンダミンニャ寺院の出胎図のように長く鋭く尖っているということはない。乳房は両方共左側に向かって丸く大きく描かれている。右側にひねった夫人の腰の上（右脇下）には，結跏趺坐して合掌した悉達多太子の小さな像がのっかっている。波闍波提は顔を正面に向け，自分の首にかけられた摩耶夫人の左腕を左手で支えている。眼はややつり上がり気味で眉が細く短い。顔は摩耶夫人よりもずっと丸顔である。下半身には横縞模様の腰布をつけている。その点，蓮華模様入りの腰布をまとっている摩耶夫人とは対照的である。波闍波提の左側にも人が1人いるが従者であろう。摩耶夫人の右下にも悉達多太子の像がある。それは“7歩の歩み”を示すと考えられる“7重の蓮華”の上に左右の手を胸の前に上げた立像である。太子の左横には傘蓋を持った人と，鉢を手にした人が1人ずつ描かれているが，それはおそらく梵天と帝釈天であろう。その下には，両手で鉢を捧げた人が9人(上，中，下各層に3人ずつ)描かれている。太子の頭上の樹の上(画の左上隅)には長い笛を口にあてた天人と，壺を逆さにして水を注いでいる帝釈天とが描かれ，右上隅には両手を差し伸べた天人2人が描かれている。摩耶夫人の頭上から右横にかけてバナナの房のような形で葉を茂らせている樹は沙羅樹であろう。

### 6. ローカオウシャウン (Loka Okshaung) 寺院

パガンからミンガバー村へ向かう道路を途中かなり東側へ入ったところにある角型のレンガ造り寺院である。前室と祠堂とから成るが祠堂の上のシカーラを欠く。建築様式からみて12世紀の前半に建立されたものと考えられている。ここの祠堂の壁面には，八臂の金剛手菩薩像が描かれている。菩薩の顔は丸顔で眉は細い。頭上には冠をいただいている。右手の側の壁面が著しく磨損剝落しているので判然としないが，左側に手が4本あることははっきり確認できる。持物は弓，宝珠，三叉などである。ここにはまた先の尖った冠を頭にいただき，縞模様の腰布を下半身につけ，右向きに坐った天人の画もある。坐り方は結跏趺坐ではない。膝をやや左右に開いてはいるものの正坐である。顔を右斜めに向けているため鼻を隔てて右眼と左眼と

の間隔が相当開いてみえる。眼は幾分つり上がり気味で，視線も斜め上に向けられている。手は左右とも肘のところで曲げて掌を上向けに拡げている。

## 7. テインマズィー (Theinmazi) 寺院

ローカオウシャウンの西北西にある基壇一層の寺院で，祠堂の上にティーロミンロ寺のようなどっしりとした角型のシカーラをのせている。13世紀に建立された寺院の一つである。ここの天井にはローカテイパンのものとよく似た仏足跡が描かれている。壁面には右向きに行列した人物群像が描かれている。いずれも右手を肘のところから前方に伸ばして手首を下に折り曲げ，左手はちょうど力瘤を見せる時のように肘から先を上に曲げて拳を握りしめている。このポーズが何を意味しているのか明らかでない。群像の中には乗馬姿もみられる。馬には手綱はあるが鞍や鐙はみられない。人物の顔は例外なく丸顔である。耳たぶに丸い大きな耳飾りをはめ，黒髪を後に長く垂らしているのは女性像だと思われる。頭を剃り，丸首長袖の黒い衣をまとった僧侶とおぼしき人物の画もある。髪の生えぎわが額の中央で下がっており，耳たぶが異常に長い。いずれも顔を左に向け，左手は胸の前で挙げ掌を外に見せている。中指，薬指，小指の三本はほぼまっすぐに伸ばしているが，人差し指だけは折り曲げて親指と接触させ環を形作っている。一方右手は，腕をまっすぐ下ろし指先を揃えて伸ばしている。前室と祠堂との境の壁面にも，冠をかぶり右手を肘のところから前に伸ばして手首を下に折り曲げ，左手は肘から上に曲げ掌を上向けに拡げた上半身裸の天人像(写真7)が見られる。坐像だが両足は共に膝のところからきちんと後に折り曲げた形，すなわち正坐であることを示している。身につけているのは腰のまわりの半パンツの様なものだけである。顔が真横ではなく斜め前を向いているため，つり上がり気味の両眼と尖った鼻とが目立つ。この寺院の代表的な画は四眼二鼻の梵天(？)像であろう。頭に先の尖った冠をかぶり，顔を右に向けた坐像である。坐り方は，左右の股を少し開き気味にしてはいるが膝のところから後に折り曲げた正坐である。左手は肘のところから前に伸ばして手首を下に折り曲げ掌を拡げている。右手は肘から先を上に曲げ掌を上向けに拡げている。ただし親指と薬指とをちょうどくっつけるように内側に曲げている。顔は正面ではなく斜め前に向けているため両眼とも見えるが，その眼が左右と

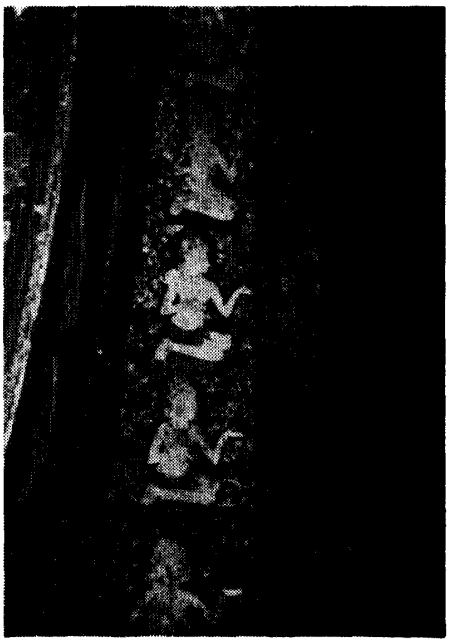

**写真7** テインマズィー寺院の天人

も上下二つずつ計四つ描かれている。[5] 眼は切れ長で大きい。眉毛は細くて長く，左右がつながって一本になっている。口も相当大きい。

## 8. ペーナタ・グー (Penatha-gu) 寺院

テインマズィーの東北，ローカテイパンの西北西に位置する三基の小仏塔群のことである。13世紀後半の建立だが風化が激しく外側のレンガは崩壊しかけている。三基の内一番右側の寺院には，説法印を結び袈裟を通肩にまとった過去28仏の坐像が描かれている。28仏とも丸顔で肉髻が屹立している。その28仏の横にビルマの土着神ナッの像が多数描かれている。ナッ神（写真8）は頭に冠をいただき，両手を肘のところから上に挙げて掌を拡げている。腕の後には肩から伸びた翼が見える。腰の後にも折り畳んだ翼が見える。脚は太股だけが太く，足先に向かうにつれて鳥の趾のように急激に細くなっている。顔はどれも丸顔である。眼は切れ長で両端がややつり上がり気味。眉毛は細い。首の左右に髪が垂れ下がっている。この人面鳥身のナッ神（あるいは緊那羅？）像の真下には，狐のような動物の首を左右の腕で一頭ずつ締めつけている蛙のような醜悪な形相の怪物や，象のような動物の首を左右の腕で一頭ずつ締めつけている出歯の怪物の姿などが描かれている。その隣（中央）の寺院には，蓮華を執ったり三叉を持ったりしている三面二臂の梵天坐像や，鎌首をもたげた龍を頭上にいただき合掌した菩薩（あるいは嚢虞梨童女？）などが描かれている。梵天像は女性的な優しい表情をしているが，菩薩像は鼻が高く眼や眉毛がつり上がり男性的な表情を示す。さらにその隣（左端）の寺院には，二層のパネル内に本生図が描かれている。人物はみな上半身が裸で髪を後に垂らしている。背景の樹には，ローカテイパンの壁画同様円の中に葉を描いたものもあるが，葉を海星状に描き分けたものもある。二層のパネルの上には過去28仏が描かれているが，そのうちの12仏は倒立，すなわち頭を下げ足を上向きに描かれている。

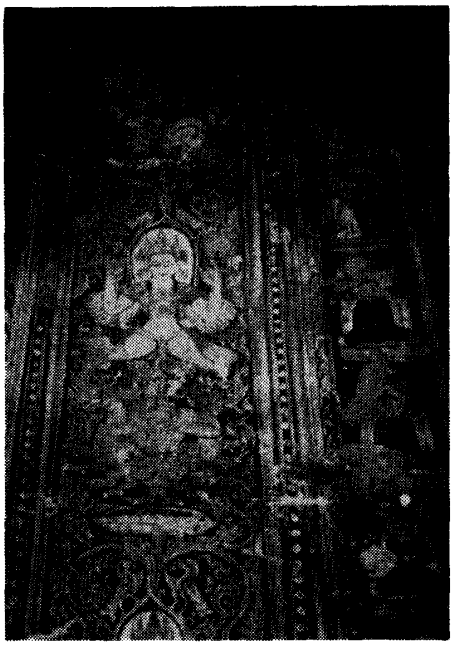

**写真8**　ペーナタ・グー寺院の緊那羅

5) 文化省編纂の概説書「古代ビルマの壁画」（ビルマ文）ではこれを“四つ眼の梵天像”だと記述しているが，文化省パガン支局の主任研究室ウー・ボウケーは，“一旦描いた人物の顔を石灰で消し，その上に新しい顔を描き直したところ，消した筈の下の画が再び浮き出てきて四つ眼に見えるにすぎない”という独自の見解を明らかにしている。U Bo Kay. *Pagan Shayhaung Thigaungzayamya*. 1971 (unpublished).

## 9. クーピャウヂー（ウェッチーイン）(Kubyaukgyi-Wetkyi-in) 寺院

ニャウンウーの市街地からパガンへ向かう道路の左側，チャンシッター・オンミン窟院の真南，ウェッチーイン村の南東にある一重構造の寺院で，上部にマハーボーディーに似たシカーラをのせている。13世紀前半に建立された寺院で東側に入口がある。壁画は前室の天井と南北両壁面とに描かれている。いずれもきわめて鮮明である。天井の中央部には角型の大きなパネルがあり，内側の各辺に15体ずつ計60体の仏陀坐像(すべて通肩)が配置され，その内部の中央に仏足跡が二つ描かれている。この角型大パネルの周囲には四円と四角とを組み合わせた蓮華模様が多数描かれ，その中にも通肩の仏陀坐像が一体ずつ配置されている(写真９)。壁面の最上層には一面に14体ずつ計28体の過去仏が描かれている。いずれも悟りを開いた樹[6]の下で結跏趺坐し，左手を与願の印，右手を触地印にした偏袒右肩の仏陀坐像である。顔は丸顔で耳たぶが長い。頭は剃っているが螺髪状はしていない。肉髻は円錐状を呈している。その下の層には各仏の予言図が描かれ，さらにその下にはビルマ語による説明文がみられる。北壁面の両端には縦長のパネルが上下に２組ずつ計８枚あり，偏袒右肩の釈尊坐像または立像が描かれている(写真10)。いずれも仏伝図で，各画の下にはビルマ語の説明文がつけられている。釈尊の顔は過去仏の顔とまったく同じで両者の間には違いがない。北側壁面の中央部，すなわち過去28仏の真下で，仏伝図と仏伝図とに囲まれた中間壁面には本生図がある。本生図は，縦横およそ15センチずつに区切られた小パネル(上下に６層ある)の中に一図一景ずつ描かれ，その下にビルマ語の説明文とジャータカ番号とが記されている。

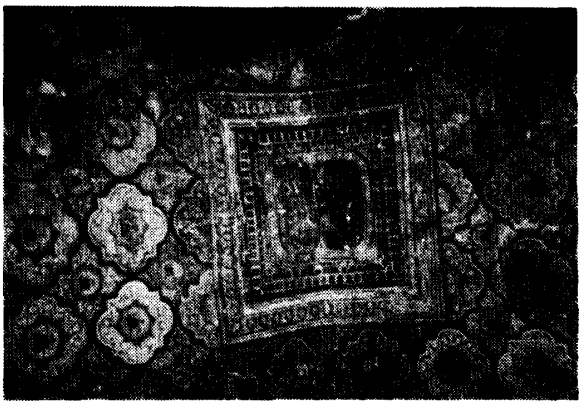

**写真９**　クーピャウヂー（ウェッチーイン）寺院の天井の仏足跡

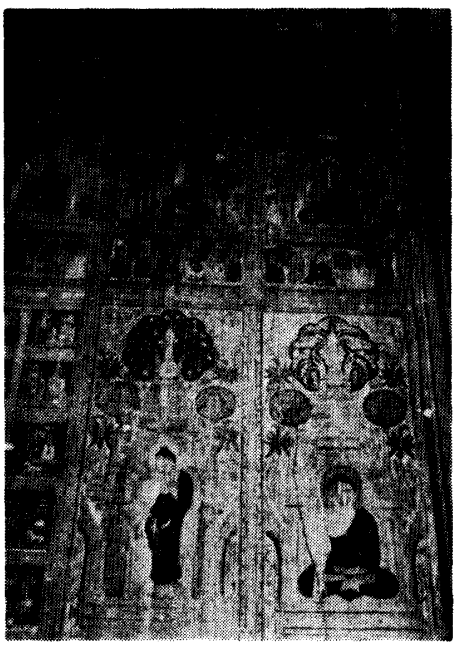

**写真10**　クーピャウヂー（ウェッチーイン）寺院の北壁の東端上層の画

6)　過去28仏はすべて特定の樹下で悟りを開いており，その具体的な樹木名については『南伝大蔵経』第28巻小部経典６の因縁物語 (Nidana Kathā) に記されているが，そのビルマ名はルースが取り上げている。Luce G.H. "Economie Life of the Early Burman," *JBRS*, Vol. XXX pt. i, pp. 315-8. Luce, G.H. "Old Burma-Early Pagdn," Vol. I, pp. 392-397.

南側の壁面には上層の28仏のパネルはみられるが，その下の本生図の部分は大きく剝ぎ取られて残っていない。前室と祠堂との境の三角小間には“悪魔の襲来”図と天人像とが描かれている。悪魔の襲来図には様々な姿の怪獣や人間の姿をしたたくさんの悪魔がうようよ描かれている。天人像は頭に冠をいただき，右足は折り曲げ，左足は後方に跳ね上げた形をしている。片手は肘から先を上に曲げ薬指と親指とで環を作り，もう一方の手は前方に伸ばしている。眉毛は細く眼は切れ長でつり上がり気味。まなざしは鋭い。鼻先は尖がり下あごも尖っている。全体としてテインマズィー寺院の天人像に酷似している。

### 10.　レーミェンナー (Lemyethna) 寺院

13世紀前半に宰相アーナンダ・トゥーリヤによって建立された基壇一層の寺院で，ミンナントゥー村の真北にある。シカーラの上には，アーナンダ，シュエグーヂー，ナガヨンなどの寺院に見られるような鋭く尖った塔がのっている。内部は東側が前室，その奥が祠堂になっている。ここには通肩，説法印の仏陀坐像が天井から床まで8列にわたって描かれている(写真11)。いずれも扇型をした樹下に結跏趺坐しており過去仏と考えられる。真円の中に結跏趺坐し正面を向いて合掌した像も数十描かれている。頭には王冠をいただいていることや縞模様の腰布をまとっていること，両肩の後に小型の翼が見えることなどの特徴から考えると，これらは仏陀像でも菩薩像でもなく，天人(またはナッ神)像だと思われる。このほか出胎など八相図を描いた大型パネルを中心にたくさんの小パネル群があるが，その中には本生図が描かれている。これら各図の下にはビルマ語で墨文が記されている。ここの出胎図はローカテイパンほど鮮明ではない。構図は原則としてローカテイパンと同じだが，摩耶夫人は首をかしげておらず正面を向いている。冠の上にも釈尊の小坐像がみられる。波闍波提の腰布がかすり模様になっているなどの違いがみられる。

**写真11**　レーミェンナー寺院の仏陀坐像

### 11.　パヤー・トンズー (Paya Thonzu) 寺院

13世紀の後半に建立されたと考えられている三基の寺院群で，レーミェンナーの東北，ミンナントゥー村から北へ向かう道路の右側にある。シカーラをのせた三基の寺院は，外から見ると別々の寺院だが内部は回廊でつながっている。壁画は東側と中央の寺院とにみられる。西側の寺院内には何も描かれていない。東側の寺院では，四方の壁面に赤茶色の袈裟を通肩にまと

い，説法印を結んだ仏陀坐像が小型の角パネルや四弁の花の中に数十体描かれている。仏陀の顔は丸顔で下あごが短い。頭部は剃髪しているが螺髪ではない。肉髻は屹立している。夾侍や背景の樹木はいっさい描かれていない。この寺院の代表的な壁画は，各壁面の両端（四隅）に描かれている男女像である。従来これらの画が密教系だとかタントラ系だとか言われてきたのは，

**写真12** パヤー・トンズー寺院の男女図

描かれている人物がどれも腰をなまめかしくくねらせていたり，男が女の首や腰に手をまわして抱きかかえたりしているからであろう(写真12)。クマーラスワーミは，これを“エロティック”と言っている。[7] 顔は男女とも面長で，額の上に冠またはヘアー・バンドのような飾りをつけている。眼は切れ長だが両端がややつり上がっている。鼻は鼻先が異様に尖っており，下あごも長ければ耳たぶも長い。パトウダーミャー，ローカテイパン，クーピャウヂー(ミンガバー)など11～12世紀頃の壁画にみられる丸顔とはきわめて対照的な顔である。腰布は，男女ともくるぶしの上まで達する長いものをまとっている。女性は耳に丸い大きな耳環をはめており，男性に比べるとはるかに小柄である。しなやかな姿態が強調されているこれらの男女像と仏陀坐像との中間壁面には，獅子や孔雀などの背に乗ったり，牛や邪鬼を踏まえたりしている，人面鳥身の緊那羅，象，虎，蛇などが描かれている。菩薩の姿はテインマズィーの天人像に似ている。なおこの天井にはカノウパン(植物を紋様化した装飾)が一面に描かれているが，ところどころに四角または八角のわくが設けられ，その中にはクーピャウヂー(ウェッチーイン)のような通肩，説法印の仏陀坐像が一体ずつ配されている。

## 12. タンブーラ (Thambula) 寺院

13世紀の中頃ウザナ王の妃タンブーラによって建立された基壇一層の小寺院で，パヤー・トンズーの東北にある。祠堂の上のどっしりとした角型のシカーラは，ティーロミンロやテインマズィーのそれと同型である。ここの壁画は，壁面上層の仏陀坐像とその下層の人物行列図，さらにその下層の本生図(四層の小パネル群から成る)，および仏像左右の壁面両端に描かれている様々な人物像などである。本生図にはその下にビルマ語の説明文が記されている。仏像左

7) Coomaraswamy, Ananda K. *History of Indian and Indonesian Arts*. London, 1927, p. 170. 立花俊道はこれを“男神がサクチすなわち女神を抱擁せる姿”を示していると解釈しているが，はたしてそのとおりかどうか今後の解明が必要であろう。飯本信之・佐藤弘編「卑洋地理大系4・マレー・ビルマ」1942, p. 386.

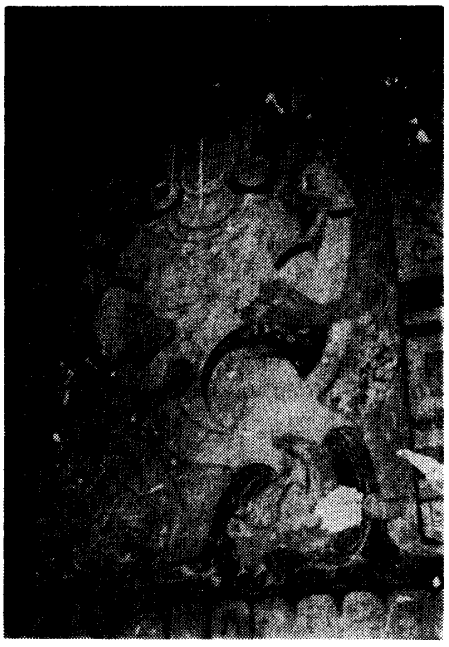

写真13　タンブーラ寺院の緊那羅像

右の上層壁面には，左右から仏像に向かって合掌した女性の姿11人ずつ計22人がみられる。いずれも足を正坐または横坐りにし，両手は胸の前で合わせている。頭には冠をいただいているがその下からは黒髪がはみ出ている。全員丸い大きな耳環をはめている。鼻が鋭く尖がり下あごが出ている点はパヤー・トンズーの女性像と同じである。下半身には様々な柄模様の腰布をまとっている。それら女性群像の下には，頭上に小さな化仏をいただいた宝冠の菩薩（観音像）らしきものが描かれている。菩薩の顔は丸顔で眼はつり上がり気味。眉は細い。耳たぶは肩に触れんばかりに長い。ここには冠をかぶり丸い大きな耳環をつけ，両手を錫杖か何かを持つような格好をした巨大な緊那羅の姿も描かれている（写真13）。緊那羅は背に翼が生えており，脚部は鷲の爪先のように鋭く尖っているが，顔はまるで女性のような優しい表情をしている。

## 13.　ナンダミンニャ (Nandamannya) 寺院

13世紀中頃の建立と考えられている小寺院の一つで，タンブーラの北にある。上部のシカーラは角型ではなく，パトウダーミャーやペッレイ，セインニェッ・ニーマなどのような螺旋状円筒形をしている。入口は東側に一つしかない。ここの壁画は，仏伝図とその周囲または下方に描かれている様々な菩薩像，天人像とから成る。仏伝図には出胎図，偏袒右肩で左手与願，右手触地印の成道像，通肩で結跏趺坐の説法像，同じく通肩で左手は与願，右手は腕の前に挙げ掌を内側に向けた遊行像などがある。ここの出胎図はローカテイパン，レーミェンナー両寺院の構図と基本的には同じであるが，摩耶夫人は顔がパヤー・トンズー寺院の男性像に似て鼻先が尖がり目つきが鋭い。顔は右を向きまなざしはやや下方に向けられている。ローカテイパンとは異なり乳房の丸味は全く描かれていない。またレーミェンナー寺院のような冠上の仏陀小像も描かれてはいない。波闍波提の顔も両寺院の

写真14　ナンダミンニャ寺院の成道像とタントラ的人物群像

とは異なり面長である。悉達多の像は，摩耶夫人の右腰の上と右の足元とに一体ずつ描かれている。腰上の像は坐像だが，足元の像は立像で両手を胸の前に挙げ顔を右側に向けている。摩耶夫人のうなじから右肩にかけて垂れ下がっている数本のほつれ毛が一種生々しい印象を与える。偏袒右肩の成道坐像は南窓の内側壁面に描かれているが，その左右で釈尊に向かい膝まづいて合掌している出家像は仏弟子であろう。おそらく左側が目犍連，右側は舎利弗と思われる。仏陀は丸顔で耳たぶが長い。肉髻は円錐形をしているが先端はあまり尖っていない。この成道像の下に女性12人の行列図がある(写真14)。いずれも下半身のみを覆った上半身裸の女人像であるが，この図がナンダミンニャ寺院の代表的な壁画でタントラ的だと称されているものである。これはPrimae Noctis を行使するため花嫁をアリ僧の寺院へ連れて行く図であるとか，菩提樹下の悉達多を誘惑せんとしている魔羅の娘達（魔女の誘惑）であるとか，パゴダへお参りに出かける途中の村人の姿であるとか様々に解釈されている。説法印の仏陀像は壁面の最上層に描かれている。仏陀の顔は丸く耳が長い。肉髻は蓮蕾状をしている。その下の層には，右手で髪の端を支え左手に握った剣を髪の根元に押し当てた落飾図が描かれている。パトウダーミャー寺院の落飾図とは左右の手が逆になっている。さらにその下の層には，横坐りになった大きな菩薩(？)像や人面鳥身の緊那羅(？)像などが描かれている。菩薩は先端の尖った冠をかぶり，耳たぶに丸い大きな耳環をはめ，右手は肘のところで上に曲げて人差し指と小指とを伸ばし，中指と薬指とは内側に曲げて親指との間で環を作っている。左手は前に伸ばし掌を拡げて下に向けている。目も口も大きく，眉毛は長く鼻は極端に尖っている。こうした顔つきはパヤー・トンズー寺院の男性像とそっくりである。緊那羅像は頭上に冠をいただき，右手は肘を曲げて胸の前に挙げ，左手はゆるやかに下げて腹部にあてている(写真15)。背中には翼，腰には尾翼がある。脚には猛禽類の足のような鋭い爪がついている。眼はぱっちりと見開かれており顔の表情も柔和で女性的である。こうした姿は，パヤー・トンズーよりもペーナタ・グー寺のナッ神像に似ている。そのほかこの寺院には，中央が黒色をした特殊な冠(編上げにした髪？)をかぶった菩薩立像や，蓮華の茎を手に執った菩薩坐像なども描かれている。これらの菩薩像は冠の頂上に小さな化仏をいただいているので観音菩薩だと考えられる。いずれも耳たぶが長く，眉毛は細

**写真15** ナンダミンニャ寺院の緊那羅像。パヤー・トンズーよりもペーナタ・グーのナッ神像に似ている。

く，眼はつり上がり気味で鋭い。なお仏伝図の周囲には虎，孔雀，水牛，ヒンダーなどの背にまたがった天人(あるいはナッ神？)像が描かれている。

## 14.　ウィニードー (Winidho) 寺院

13世紀初頭に建立された寺院で，東側の前室と西側の祠堂とから成る。祠堂の上には四面体のどっしりとしたシカーラがのっている。寺院の位置はナンダミンシャの北北西，タヨウピェー寺院の北北東で，ミンナントゥー村からは北約1マイルの地点にある。壁画は，壁面中央の仏陀坐像とその周囲の角型小パネル群，およびそれ以外の場所の天人(またはナッ神)群像とから成る。壁面中央の仏陀坐像は袈裟を偏袒右肩にし，三重の支提の中で結跏趺坐して説法印を結んでいる。顔は丸顔で耳たぶが長い。肉髻は蕾型である。螺髪はない。仏陀の左右に一体ずつ見られる夾侍は目犍連と舎利弗だと考えられる。この大型パネルの周囲にある角型小パネル群の中にも大型パネルと同じ画題，すなわち両側に夾侍を一人ずつ配した支提の中の仏陀坐像が数十描かれている。そのほか小パネル群の中には仏陀と弟子との交流を描いたものが少なくない。パネル下の説明文(ビルマ語)によると，仏弟子は舎利弗であったり迦葉であったりする。天人(ナッ神)像は天井や壁面の両端，前室と祠堂との境界壁面などに描かれている(写真16)。頭に先の尖った冠をかぶり，大きな耳飾りをつけ，パンツ状の短い腰布をつけている。左足を折り曲げ右足は後方に跳ね上げて両手を前に突き出した姿は，クーピャウヂー（ウェッチーイン）寺院の天人像に似ている。もっともウィニードー寺院の天人像は，左手で燭台を支えていたり，両手を左右に拡げて掌に蓮の蕾や茎をのせていたりするなど持物に特徴がみられる。もう一つの特徴は，蓮華の上に坐しているのではなく，奇妙な顔をした怪獣の頭部を足下に敷いている点である。

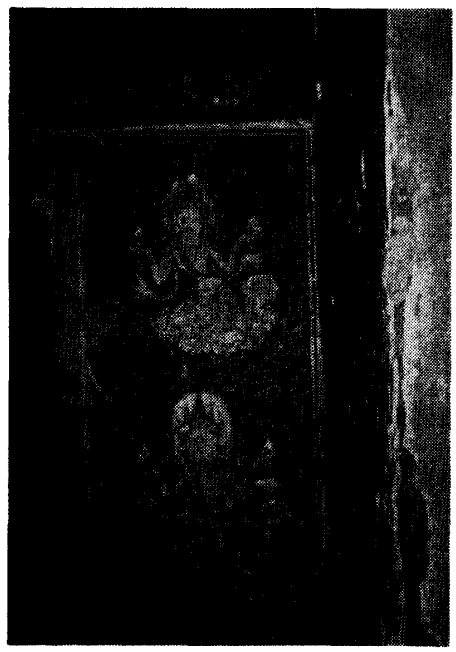

**写真16**　ウィニードー寺院の天人像

## 15.　イッザゴーナ (Izagona) 寺院

ウィニードーの東にある基壇一層の小寺院である。祠堂の上には角型のシカーラと，さらにその上にナガヨンやゴードーパリン寺院のような尖塔をのせている。壁画の中心は袈裟を通肩にまとった説法印の仏陀坐像である。背景には支提も夾侍も樹木もいっさい描かれていない。壁画は壁面の上から下に十一層あるが，各層にこうした仏陀坐像が12体ずつ描かれている。この寺院には三面六臂の梵天立像も描かれている。

## 16. パヤー・ンガーズー (Paya Ngazu) 寺院

ニャウンウー町からパガンへ向かう道路の左側，ティーロミンロ寺院の南西，ウパーリテイン戒壇の南南西にある五基の小寺院群である。螺旋状円錐型のシカーラをのせている。五基とも独立した別々の寺院で，パヤー・トンズー寺院のように内部が回廊でつながっているわけではない。壁画は各寺院によって画題が異なる。第1は天井の装飾画である。天井一面に八角形と四角形のわくが交互に描かれ，それらのわくの中にぜんまい状の葉が8枚，さらにその内側に円がありその中に6弁の花が描かれている。第2は仏伝図である。仏伝図は縦長の大型パネルで，支提の中の仏陀坐像とその両側から仏陀に向かって合掌している三人ずつの在家信者とを描いている。大型パネルの左右にも通肩で禅定印や説法印を結んだ仏陀坐像が描かれている。仏陀の顔は丸顔で耳たぶが長い。肉髻はパトウダーミャーやナガヨンのような屹立型ではなく，まんじゅうのように丸くふくらんだ形をしている。頭部は螺髪にはなっていない。坐り方は足裏を上向けにした正確な結跏趺坐である。第3も仏伝図であるが，この仏陀は立像で袈裟を偏袒右肩にまとっている。左右に一人ずつ弟子を従え，右下から長い鼻をもち挙げて見上げている一頭の象をじっと見おろしている。ナーラーギリ象調伏の場面であろう。第4は壁面四隅に描かれた人物，菩薩，緊那羅，ナッ神などの像である(写真17)。人物図は男性が小柄な女性の肩に腕をまわし互いに顔を見合っている図であるが，姿態しなやかでパヤー・トンズー寺院の男女図によく似ている。その上層には先の尖った冠をかぶり，丸い大きな耳環をはめ，両手を胸の前に挙げて掌を前方に向けている天人(菩薩？)の像が描かれている。両足共膝を曲げ爪先を立てて坐っているが，左右の太股とふくらはぎとの間に鹿を一頭ずつはさんで締めつけた奇妙な格好をしている。緊那羅は冠をかぶり，女性的で柔和な顔をしているが背中には翼を具えている。脚は鳥の趾のようになっており，鎌首をもたげた蛇を爪先でわしづかみにしている。鼻先が鳥の嘴のように鋭く尖り，眼つきが鋭く，唇をひきしめた男性的な顔つきの緊那羅もみられる。羽毛はまるでいそぎんちゃくの触手のように揺らめき，短くて太い両脚の爪で水牛のような動物の頭を押さえつけている。

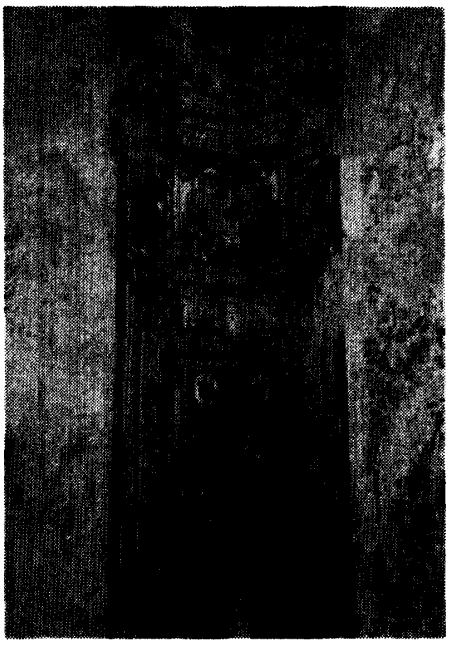

**写真17** パヤー・ンガーズー寺院の緊那羅，ナッ神像

## 17. ケーミンガ (Hkeminga) 寺院

パヤー・ンガーズー群の北東にある基壇二層の寺院で，上に角型のシカーラをのせている。

**写真18**　ケーミンガ寺院の女性像

壁画は等身大の女性像(写真18)で，前室と祠堂との境界壁面に描かれている。この画は冠，持物，衣装などパガン時代の風俗をうかがうことのできる貴重な資料である。11～12世紀頃の人物画とは異なり上半身にも衣をつけている。上衣はかろうじて鳩尾まで届くくらいの短いもので半袖である。全体に方形の細かい模様が入っている。縁どりのある丸い襟章のような飾りを両肩につけ，背中には肩から臂部まで覆う長いゆったりとした外衣をはおっている。下衣は下半身全体をすっぽりと覆うぐらいの長さがある，斜交に縞模様が入っている。幅広の帯のようなものをへそのあたりから前に垂らしている。頭には先の尖った冠をいただき，耳環，腕環などの装飾品を身につけ，柄の長い傘(または先端に飾りのついた錫杖？)を両手でもっている。顔はうりざね顔。眼は切れ長だが半眼になっている。眉はきわめて細く長い。髪の生え際が額の中央部で下がっているのも特徴の一つである。パヤー・トンズー寺院の人物画に見られるような長い尖った鼻はしていない。すらりと均整のとれた体格をしており，7等身くらいはあると思われる。

### 18.　ティーロミンロ (Htilominlo) 寺院

13世紀前半にナダウンミャー王によって建立された基壇二層の大型寺院で，ニャウンウー町からパガンへ向かう道路の左側，ウパーリティン戒道の南東の位置にある。壁面の画はかなり不鮮明になっているが，天井に描かれている装飾文様だけは今でも鮮かである。これは円の周囲を四つの円で取り巻き，さらにその外側を大きな円で囲んだもので蓮華を象徴していると思われる。

### 19.　テッチャムニ (Thetkyamuni) 寺院

13世紀初頭に建立された基壇一属の寺院で，ニャウンウー町の東1マイルの地点，イラワジ川の左岸に位置している。壁画はテッチャムニ寺院よりも隣接の小窟院の内部に描かれているもののほうが豊富でしかも鮮明である。画題は支提内の仏陀坐像を中心とした釈迦八相図，本生譚，天人像などである。支提内の仏陀坐像は降魔成道像で，袈裟を偏袒右肩にまとっている。頭部は螺髪にはなっていない。肉髻は屹立型ではなく，パヤー・ンガーズー寺院の壁画のようなまんじゅう型をしている。左右には一人ずつ仏弟子がおり仏陀に向かって合掌している。八相図の配置状況は他の寺院と同じで，上層中央が入涅槃図になっている。各画の下にはそれぞ

れビルマ語の説明文がつけられている。入涅槃像は身体の右側を下にし，向かって左側に頭を向けて横たわっている。右手は頭の下に敷き左手は真直ぐ伸ばしている。釈尊の背後(画面では上部)には小さな支提が見え，頭の後には円形に葉を茂らせた沙羅樹が2本描かれている。そして釈尊の前(画面では下部)には8人の人物が膝まづいており，釈尊に向かって合掌している。

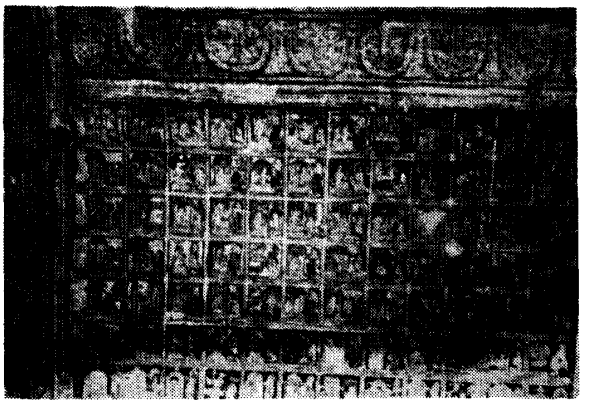

**写真19** テッチャムニ寺院の本生図

本生図は数十の小パネル群の中に描かれている(写真19)。上から6段目までは鮮明だが，7段目になると幾分不鮮明になっている。なお各図の下にはビルマ語の説明文がみられる。天人像は三角小間の壁面に描かれており，クーピャウヂー(ウェッチーイン)やウィニードー寺院の天人像と同じように右足を膝のところで折り曲げ，左足は後方へ跳ね上げた形をしている。頭には先の尖った冠をかぶり，耳には丸い大きな耳環をはめ，腰には短いパンツをはいている。眼は半眼ではなくぱっちりと大きく見開かれている。左手は肘から先を前方に伸ばし掌を下に向けている。右手は肘から先を上に曲げ，人差し指と小指を伸ばし，親指，中指，薬指の3本は折り曲げて蓮の茎を握りしめている。足下にあるのは蓮の葉状を呈してはいるが，飛翔中の天人像から考えると雲であろう。

## 20. コンドーヂー (Kondawgyi) 寺院

13世紀前半に建立された基壇一層の寺院で，テッチャムニの真南の丘の上にある。ここのシカーラは円錐型である。壁画は天井の装飾模様，壁画の仏伝図，本生図，天人像などから成る。天井の中央には蓮華を象徴した四弁の大輪があり，四方に向かって放射状に直線が伸びている。その線との間にはクーピャウヂー(ウェッチーイン)寺院の天井にみられる四角と四円とを組み合わせた花弁模様が数十あり，その中に触地，禅定，説法，施無畏，与願など様々な印を結んだ通肩の仏陀坐像が描かれている。天井と接した壁面の最上層部には蓮の葉が一列に並び，その葉の中には冠をかぶって合掌した菩薩坐像が描かれている。その蓮の葉の下層が仏伝図で，立像，坐像，臥像の仏陀像が描かれている。いずれも丸顔で耳が長い。肉髻は円錐形である。その仏伝図の下層には数十の小パネル群があり，その中に本生譚が描かれている。祠堂と前室の境の壁面には，最上層の蓮の葉の下に通肩説法印の過去28仏が描かれ，さらにその下層に阿育王の業績が図示されている。28仏にも阿育王の業績図にもビルマ語の説明文がつけられている。その下にはカノウパンとよばれる植物の装飾文様で，ところどころにナンダミンニャやパヤー・ンガーズー寺院の菩薩像と同じ黒色の特殊な冠(または

**写真20**　コンドーヂー寺院の過去28仏と天人像

編み上げにした髪？）をかぶった上半身裸の天人（またはナッ神）像や三面の梵天像などが描かれている（写真20）。いずれも右または左足を折り曲げ，もう一方の足を後方に跳ね上げている。手にはそれぞれ傘を持ったり蓮の茎を執ったりしている。合掌している姿も見られる。植物の装飾文様の隙間にはたくさんの円が描かれ，その中に鳥，孔雀，鹿，猿，牛，馬，虎などの動物や，それらの動物の背にまたがった人間（菩薩？）の姿が描かれている。壁面の仏伝図は偏袒右肩の大きな成道像である。顔は丸顔で耳たぶが長い。額の生え際が波型になっているのは螺髪を示そうとしたものであろうか。肉髻は瘤状で尖ってはいない。

## 21.　ヤッサウ (Yatsauk) 寺院

チャウクー・オンミン (Kyauk-ku Umin) 窟院の上の台地に建っている小寺院。内部には数十の小パネル群があり，一図一景の本生図が描かれている。壁面がところどころ剝落しているだけでなく，画も下層のパネルになると不鮮明である。各図の下にはビルマ語の説明文がつけられている。

## 22.　チャンシッター・オンミン (Kyanzittha Umin) 寺院

ニャウンウー町の西端，シュエズイゴン・パゴダの真南にあるレンガ造りの窟院である。壁画は仏教的なものと世俗的なものの双方が窟院内部の回廊壁面に描かれている。仏教的なものとは言っても仏伝図や本生図ではない。あるのは菩提樹下の支提であり，その支提に向かって花を手に合掌した比丘や優婆塞の姿である（写真21）。比丘は袈裟を偏袒右肩または偏袒左肩にまとい，地面にひざまづいて合掌している。眼は大きく耳たぶが肩に触れんばかりに長い。髪の生え際が額の中央で下がっているのは他の寺院の人物像と同じである。優婆塞の姿も比丘と大差はない。眼が大きく眉毛長く，鼻筋が通っていて唇は固く結ばれている。頭部が身体全体に対し

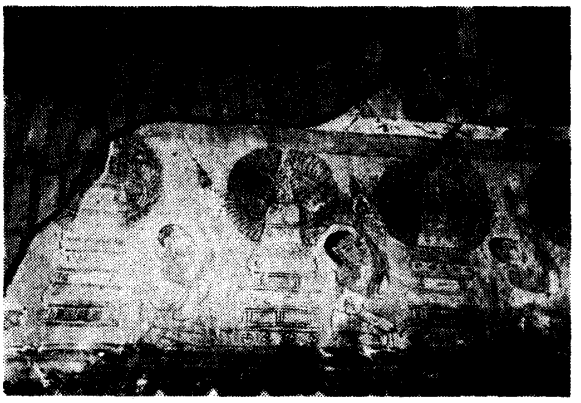

**写真21**　チャンシッター・オンミン内の礼拝図

て不鈞合なほど大きい。支提の上層には瞑目合掌した菩薩像が描かれている。菩薩は先の尖った冠をかぶり，耳に丸い大きな耳環をはめ，左右の手を胸の前で合わせている。足は左足を内側，右足を外側にした半跏である。腕と脇の間を蓮の茎が通り抜け上に伸びている。世俗的な画には，壺を両手で支えた女の立ち姿，左手を真横に右手は左斜め下に伸ばし足を開いて腰をやや落とし気味にした舞踊姿，左足をもちあげ角笛を口に当てている男，後から比丘に傘をさしかけている白装束の男，弓に矢をつがえている兵士の姿などがある。兵士は日除けのついた編笠のような帽子をかぶり，長袖の上衣に長ズボンを着用している。こうした服装はほかの壁画には見あたらない。ビルマ兵ではなく元軍の兵士だと言われている。ここの壁画は，ほかの寺院の壁画に比べると全般的に画法が幼稚である。

## 参考文献


Ba Shin, Bohmu. 1964. *Pagan Minzazu Thudaythana Lokngan.* Rangoon.
Bo Kay, U. 1971. *Pagan Shayhaung Thigaungzayamya.* (unpublished).
Hla Tha Mein. 1968. *Pagan Kkit Myingwingye.* Rangoon.
———. 1959. "Zat-gyi Hsebwe," *Yinkyayhmu Sazaung*, Vol. III, Pt. 5, pp. 31–36.
Mya, U. 1968. *Abeyadana Laingu Paya.* Rangoon.
———. 1961. *Shayhaung Otkwet Yokpwa Hsintudawmya.* Rangoon.
Nai Pan Hla. 1963. "Mon Batha Zat 550," *Yinkyayhmu Sazaung*, Vol. IV, Pt. 3, pp. 86–89.
Pyidaungzu Yinkyayhmu Htana. 1966. *Shayyoe Myanma Bagyi.* Rangoon.
Taik Soe and Min Yu Wai. 1965. *Pagan.* Rangoon.
Thein Han, U(Zaw Gyi). 1951. "Shayyoe Myanma Bagyi," *Shumawa* Apr. pp. v-x, 5–8, 173.
———. 1951. "Pagan Hkit Buddhawin Bagyi," *Shumawa,* Aug. pp. 4–8, 116.

---

Aung Thaw, U. 1972. *Historical Sites in Burma.* Rangoon.
Ba Shin, Bohmu. 1962. *The Lokahteikpan, Early Burmese Culture in a Pagan Temple.* Rangoon.
Ba Shin, Bohmu, Whitbread K. J. and Luce G. H. 1971. "Pagan, Wetkyi-in Kubyauk-gyi, an Early Burmese Temple with Ink-glosses," *Artibus Asiae*, Vol. XXXIII, 3. pp. 167–218.
Bigandet Rev. P. 1880. *The Life or Legent of Gaudama, The Buddha of the Burmese.* Vol. I, II. London.
Cowell, E. B. 1895. *The Jātaka or Stories of the Buddha's Former Births.* Vol. I–VI. Cambridge U. P.
Coomaraswamy, Ananda K. 1972. *History of Indian and Indonesian Art.* London.
Duroiselle, Chas. 1961. "The Talaing Plaques on the Ananda," *Epigraphia Birmanica*, Vol. II, Pt. 1.
———. 1912/3. "Pictorial Representations of Jātakas in Burma," *ARASI*, pp. 87–119.
Edwordes, Michael. 1959. *A Life of the Buddha, from a Burmese Manuscript.* London.
Griswold A. B., Kim Chewon, Pot P. H. 1964. *Art of the World, Burma, Korea, Tibet.* London.
Grünwedel, A. 1901. *Buddhist Art in India.* London.
Luce, G. H. 1956. "The 550 Jātakas in Old Burma," *Artibus Asiae*, Vol. XIX, 3/4, pp. 291–307.
———. 1960. "The Greater Temples of Pagan," *BRSFAP*, No. 2, pp. 169–178.
———. 1960. "The Smaller Temples of Pagan," *BRSFAP*, No. 2, pp. 179–186.
———. 1959. "Old Burma-Early Pagan," *Artibus Asiae*, supplementum Vol. I, II, III.
Luce, G. H. and Ba Shin, Bohmu. 1961. "Pagan Myinkaba Kubyauk-gyi Temple of Pājakumar," *BBHC*, Vol. II.
Lu Pe Win, U. 1955. *Pictorial Guide to Pagan.* Rangoon.
———. 1966. *The Jātakas in Burma. Essays offered to G. H. Luce.* Vol. II, pp. 94–108.
Rowland, B. 1938. *The Wall Paintings of India, Central Asia and Ceylon.* Boston.
———. 1953. *The Art and Architecture of India.* London.
『南伝大蔵経』第28巻（本生経１）～ 第39巻（本生経12）.
世界美術全集 1953 『インド・東南アジア』第11巻，平凡社.
赤沼智善訳 1928 『ビガンデー氏緬甸仏伝』東京.
畑中俊應 1929 『ビルマ遊記』東京.
クマーラスワミ著，山本智教訳 1944 『印度及び東南亜細亜美術史』東京.